



市民の皆様の声

●普天間基地移転についての素朴な疑問

普天間基地移転問題で全国的に有名になった宜野湾市ですが、その移転問題で疑問があります。それは、地権者の方々への地代の問題です。当たり前の話ですが、基地が存在する限り得ることができる収入が移転後はゼロになるわけですよね？当然、基地移転の立場をとった宜野湾市は、日本政府からの思いやり予算はもらえませんか！じゃあ地権者の方々には…高齢者の方が多い？子孫がいれば地権は相続するでしょうか、収入がなくなることについてそう簡単に納得するとは思えないのですが。売却したらそれまで…基地があればほとんど永久的な収入！邪推ですが、まさか宜野湾市が何らかの形で保障…そんな事は絶対ありえませんか！お金が絡むゆえ、納税者の納得のいく再開発を期待しています。

宜野湾市に限らず沖縄県の将来において、基地が無くなる事によるマイナスの経済効果、全国平均以下の労働賃金という現実をもっと真剣に考えて欲しいと思います。何でも反対！そんな平和な時代はずっと終わっていると思うのは私だけでしょうか？

【基地跡地対策課からの回答】

貴殿のおっしゃるとおり、地権者の平均年齢は、六十歳を超え年間総収入に占める地代の割合が高くなっており、地代収入がなくなると生活できない地権者が出てくることも予想されます。そのため、土地活用が出来るまでの間、軍用地料に代わる国の助成措置として、一地権者当たり二千万円を上限に給付金として支払われる制度が創設されています。また、今年度末に策定します市・県共同で取り組んでいる「普天間飛行場跡地利用基本方針」においても、広域的な計画との連携による土地利用可能性の拡大が謳われており、地権者懇談会や

宜野湾市では、市民の皆様様の市政への参加を推進し、よりよい街づくりを共に考えることができるよう、ご意見・ご要望を受け付けております。日頃、市政に対して抱かれていますの提言、要望などをお寄せ下さい。

勉強会を通して情報を提供するとともに地権者や市民・県民との協働による計画づくりを実施していきます。普天間飛行場の跡地利用につきまして、沖縄本島中南部のほぼ中央の極めて重要な位置に存するとともに、約四百八十一ヘクタールと近年類例を見ない大規模な返還軍用地の跡地利用となります。戦後六十年にわたり歪められつつあった中南部地域の都市構造を是正する絶好の機会であることから、国が策定した「沖縄振興計画」の中においても「沖縄の振興をリードする高次都市機能の導入や基幹道路の整備等、総合的かつ計画的に進める。」とされており、広域的な都市機能を導入するためには、地権者の理解と協力が不可欠となります。

そのため市と県においては、地権者の合意形成を図ることが重要であるとの認識から、国と連携を図りつつ地権者の生活再建方策についても併行して検討を重ねてまいります。なお、基地があるが故の経済効果は、以前に比してかなり小さくなっており、それより民間地域の中央部に米軍の飛行場があることによる飛行機の騒音や墜落の危険性による市民の生命・財産に対する危機の方が問題ではないでしょうか。このことは、昨年の沖縄国際大学への米軍ヘリ墜落炎上事故が如実に物語っているのではないのでしょうか。

宜野湾市としましては、市民の生命の安全・財産の保全を第一に考え、普天間飛行場の早期返還を訴え続けておりますのでご理解賜りたいと存じます。

◆問い合わせ先
基地跡地対策課
八九三―四四二―
八九三―四四二―
（内線三〇九）

投書の仕方
*庁舎一階に「ご意見箱」が設置されています。
*宜野湾市ホームページ内「ご意見・ご要望」コーナーよりメールが送信できます。
*皆様の声をお待ちしております！

高齢期の健康づくりの七箇条

病気や痛みなどで閉じこもりがちな生活を続けていると、運動機能が衰え意欲や知力の低下も起こることが知られています。逆に、日常生活の中で積極的に体や心を動かしていると、心身が健康的になり、日常生活が向上し、そのことが社会参加の機会を増やし…と良い循環が生まれます。高齢期を楽しく充実したものにするために、次に挙げる七箇条を実践しましょう。

- 一、自分は健康！と考えよう
健康だと思っている人ほど健康で長生き！
- 二、食規則正しく食べよう
高齢者の食は低栄養の予防が肝心！
- 三、趣味や生きがいを持とう
健康寿命を延ばす原動力になります
- 四、週に5日以上は外出しよう
散歩や買い物交流の場に出かけましょう
- 五、毎日、新聞を読もう
社会の動きに関心を持つことも大切です
- 六、健康情報に関心を持とう
自分の健康は自分で守りましょう
- 七、相談相手や親しい友人を身近につくらう
地域に知り合いを増やしましょう

介護長寿課 高齢福祉係
八九三―四四二―（内線二八三）

茶ぐわーゆんたく 22

まつりの足跡

かつて旧暦二月（ところにより三月）には、田植え終了後の慰労会「腰憩い」が行われ、集落によっては農作物の品評会（共進会）が催されました。

戦後、宜野湾では村が共進会を開催し、農業の発展を奨励していましたが、兼業農家の増加など、生活基盤の変化に伴い、各行政区内の経済や納税の状況、児童生徒の学校への出席率なども合わせて審査する「総合共進会」へと、会の趣旨内容も変化していきまし。その後、紆余曲折を経て、一九六七（昭和四二）年には、従来の総合共進会と市商工祭を統合した第二回産業まつりが、宜野湾市と商工会議所の共催によって行われました。市内の目抜き通りは提灯や万国旗で飾られ、まつりの初日には80台あまりの車がパレードして回るなど、市内全域がおまつりムードに包まれました。

時代を経て、現在、宜野湾市では、市役所向かいの市民広場を会場に、毎冬、産業まつりが開催されています。まつりの来歴からも、豊かな農村から産業が発展してきた過程が垣間見られます。



第2回 産業まつりの風景 1968(昭和43)年 (普天間)

「宜野湾市史」への問い合わせ
教育委員会文化課
八九三―四四二―